

## ピリピ人への手紙2章12-18節 「従順な生活」

### 1A 救いの達成 12-13

### 2A 傷のない神の子 14-16

### 3A 注ぎの供え物 17-18

#### 本文

私たちの学びは、ピリピ書 2 章 11 節まで来ました。パウロはピリピにある教会の人々に、一致することを訴え、そのためにはへりくだりが必要であることを教えました。そのへりくだりは、キリスト・イエスのうちにも見られるものである、と言いました。そして、6 節から 11 節までキリストのへりくだりについて述べています。ここをもう一度、読んでみたいと思います。「8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。9 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、11 すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」そして 12 節に入ります。

### 1A 救いの達成 12-13

12 そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

パウロは、「そういうわけですから」という言葉で始めています。どういう訳かと言いますと、「いつも従順であったように」とありますから、8 節にある「従う」という言葉からつながっています。イエス様が、神の身分であられたのに、ご自身を卑しくされて人の姿を取り、死にまでも、実に十字架の死にまでも父なる神に従順でありました。父なる神を選び取るために、ご自分の全てを捨てられました。同じように、私たちがキリストを取るために自分の全てを捨てていくのが、信仰であります。この「**従順である**」という言葉が、これからのパウロの勧めのキーワードになります。

従順という言葉は、ちょうど子供が父親に従うように、自分のしたいこと、自分の考えていることはあるけれども、ただ父親が言ったからという理由だけで、その権威に自分に意志を合わせることです。実は、神の福音を信じるという行為は、従順に基づいています。「それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。(ローマ 1:5)」イエス様を主として、自分の罪から救う方として信じて、受け入れるということには、従順な心が必要です。どんなに口で、「私はイエス様を信じます。」と言ったところで、その福音の言葉を心から受け入れていなければ、後で全くその告白を否定するようなことを話したり、行なったりします。結局、その人は信じて

いなかった、ということになります。

ですから、福音を信じる時から従順な生活を始めたのですが、その中で主がご自分の救いの働きを行ってくださいます。確かに、この人をわたしは救ったのだという証拠、その実を、その人の人生の中に結ぼうとされます。神が、私たちの思いや意志に働きかけ、そのことに私たちが従順になっている時に、確かに神が喜ばれるとおりの姿に変わっていくのです。その行き着く先は、15 節、「傷のない神の子」であります。聖霊の力によって、キリストの似姿に変えられることです。この過程、プロセスをパウロは「救いを達成する」と表現しました。

パウロはこの手紙で、神の救いについてとても具体的に書いています。1 章 6 節において、「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」と言っています。主が携挙によって来臨される時に完成される、その良い働きとは何か？ 次の節を見ると、「私とともに恵みにあずかった(7 節)」とあり、これはピリピの人たちがローマに軟禁状態にされているパウロに、支援金を送ったことであります。彼らが神に救われていることが、パウロの福音宣教の中にある恵みと一緒にになりたい、その交わりに預かりたいと願ったのです。神に救われて自己満足するのではなく、むしろ共にその恵みにあずかるという無私の行動に駆り立てました。このように、救いには積極的な善行が伴っています。

さらに、ここの箇所から大切なのは、「あなたがたのうちに」と複数形になっていることです。あなたという個人ではなく、あなたがたという共同体の中で始まったことだということです。つまり、神の救いというのは、“群れ”の中で発展します。個人修養ではなく、教会という共同体の中で展開されていくものだ、ということです。したがって、互いの関係の中で主が良い働きをしてくださっていて、そこにいかに私たちがその御体の部分として相互に関わり合っているのか、というダイナミックな流れの中にあることなのです。これが、ピリピの教会において課題となっていた「一致」に関わります。私たちは、共同体として神の救いに関わっており、自分のしていることが他者に影響を与えるということを手得ていなければいけない、ということなのです。

そして、3 章 12 節に戻ってください。12 節の「自分の救いの達成」というのも、個人の救いもありますが、それ以上に私たちの共同体としての救い、つまり教会がキリストの来臨によって携挙されることを含めたところの救いであることが分かります。私たちが神の救いを考える時に、「ここにいる仲間が、私たちが、神の救いという壮大なドラマの一部にされていて、完成の時には共に携挙に預かるのだ。」という意識があるのです。私たちはそれだけ、キリストにあって堅く結び合わされている、ということですね。

「達成する」という言葉ですが、これだと救いを何か自分の行ないで完成させなければいけないのか、というように聞こえるかもしれません。そうではありません、13 節を見ますと自ずと分かりま

す。13 節では、神が私たちの中で働いてくださり、その中に留まって従順でいることが、12 節の「救いの達成」になります。主が初められて、主が前進させてくださり、主が完成させてくださいます。そして、ここの「達成する」というのは、「完成に至るまで取り組む」という意味合いがあります。例えば「まだ解けない数学の問題を解き明かす」という意味合いです。または、「鉱物を掘り出す」という時に、鉱山から可能な限りの貴金属を取り出すという意味合いになります。つまり、私たちがキリストの似姿になるための、その試金石が私たちの中に、私たちの間に眠っているので、主がそれを掘り起こしてくださる、という意味合いになります。

そこで、「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」となっているのです。私たちの内に一つの志、意志が与えられます。意志に働きかけられた神は、その事柄に力を与えて、事を実際に行うことができるようにして下さいます。ですから能動的であり、活動的です。神が働きかけて、そこで私たちはその働きに乗るために、自分というものが清められて、練られて、そして砕かれて、主のなさりたいことの器として整えられています。

12 節でパウロは、「私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて」と言っていますね。恐れおののくというのは、何も恐怖におびえるということではありません。「自分は全く頼りにならない」ということです。主が救われなければ、私たちは失われている。しかし、主の恵みによって私たちは今、ここに立っている、という立場です。この前、興味深いことを私たちは交わりの時に話しました。「もし、イエス様を信じていなければ、この方によりすがっていなければ、たった一日で、私たち教会の人たちは互いを嫌いになって、憎んで、去っていくだろう。」私たちの内から出てくる、汚れた思い、その肉について良く知っているからです。主の憐れみと聖霊の清めがなければ、私たちは愛によって一つに結ばれていることはできません。

もう一つ、この「恐れおののいて」という言葉には、先のイエス様が高く上げられているところを意識していることでしょう。つまり、すべての口が、「イエス・キリストが主である」と告白することです(11 節)。これは、神の最後の審判が背景にあります。イエスを拒んで死んだ者も最後の審判で甦ります。そして、行ないの書物に従って裁かれて、火を硫黄の池に投げ込まれます。もちろん、生きている時にイエスを主と信じた者たちも天において、イエスが主であると告白します。パウロがテモテに、「2テモテ 4:1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。」という言葉の通りです。主がこの曲がった時代を裁かれる、そのような切迫した中にあって、主を畏れかしこみつつ生きなさいということになります。

さらに、「私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら」と言っています。パウロは今、牢獄にいますから、彼らと共にいることはできません。しかし、いなくても、いやいなからこそなおのこと熱心になりなさいと彼らを励ましています。私たちは、主の働きに応答する時とそうでない時

は正反対の反応をします。パウロがいる時には信仰につながっているけれども、そうでない時は離れているということも可能です。自然の流れではそうなるでしょう。しかし、パウロがいないからこそ、むしろ主に対してさらに熱心になって、主の聖霊が彼らを励まし、力づけ、ますますキリストにつながることもできるのです。パウロはもちろん、後者になるように教えています。

## **2A 傷のない神の子 14-16**

14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。

大切な戒めです。主が働かれる時に、私たちがそこに従順でいる時に、必ずしも楽しいことばかりが起こるわけではありません。むしろ 1 章 27-28 節にあるように、奮闘すること、反対者がいることが多々あります。そこで、いくらでもつぶやくこと、言い争うことができるのです。(ここの「疑う」は、「理屈を言う」という意味もあります。)現にピリピの教会において、そのことが少し起こっていて、互いに競争していた、一致できていなかったということがあります。

私たちは、世においてはつぶやくこと、言い争うことは常であることを知っています。職場においては、上司の悪口を言い、互いの欠点を言い連ねることは当たり前のことでしょう。しかし、神の子どもたちの間ではそうではありません。ヤコブは、「5:9 兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます。」と言いました。私たちが裁く時は、それは自分を神の位置に置いていることであり、それゆえ裁かれます。しかし、愛する兄弟姉妹の間では、嫌に思えるようなことでも、主がここにおられる、主がここで働いておられる、主が何か良いことのためにこのことを許しておられる、と信じることができます。それで感謝できるのです。悪いことをされても、なおのこと善で報いることもできます。これも、自分の悟りではなく、信仰によって行います。

15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、16 いのちのこばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。

私たちが、不満にならないで、理屈をこねないで救いを達成していれば、その中で主が私たちを練り清めてくださいます。「非難されるところのない純真な者となり」と言っています。これはパウロは 1 章で彼らのために祈っている祈りの中にありました。「1:10-11 あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。」「純真」というのは、混ぜ物がないということです。つまり、キリストの流れが私たちの間に、私たちの内にあり、そこに私たち自身という不純物が入っていない、ということでもあります。そして、「非難されるところのない」というのは、教会外の人が共同体を見て、

そこに非難すべきところが見えないということです。つぶやいていたり、理屈を言っているのであれば、「結局、教会というのも、この世で行っているのと同じことをしているではないか。」ということと言われることのないようになる、ということでもあります。

これらのことは、聖霊の力、神の恵みがなければもちろんできないことです。そして、主イエス・キリストが戻って来られる日のことを思って、このようになることを求めます。主が戻って来られて、地上で行っていることへ報いを与えられるということを知っていれば、私たちの地上での歩みは自ずと、主を畏れかしこむ生活へと変えられます。自分が果たして、どこまで本気で主が来られるのを思っているのか、その人の実を見れば分かります。

そして、「曲がった邪悪な世代の中にあつて傷のない神の子どもとなり」と言っています。この世界は、主にあつてまっすぐにされているところから、罪によって曲がってしまいました。そして、曲がった世代に対して、主は災いを降り注がれます。ご自分の怒りを神は注がれます。五旬節の時、聖霊が注がれた時に、悔い改めたユダヤ人たちに対して、「この曲がった時代から救われなさい。(使徒 2:40)」と勧めました。しかし、主は共同体がしっかりと、この曲がった時代の中で神の子として立っていることを勧めています。

つまり、主の共同体はしっかりとこの世の中で生きるということです。私たちは、曲がっているのであれば、その曲がっているを見ないで済むなら見ないでいたいと願います。そして、この世、そういった人々の悪や不正について、そういったものは無いものであるかのごとく、自分たちのことを楽しんでいようとすることも可能です。しかし、それは主が望まれません。他方で、この曲がった世代から救われた者として生きるのではなく、そのまま不信者とくびきを共にして、世的に、肉的に生きることも可能であります。しかし、このことをすると共同体の交わりは壊れて、分裂したり、傷を受けます。そのどちらでもありません。私たちは、この世にあつて奮闘します。つまり、この世にある困難に対して、真正面から取り組んで、その中でもまれながら、聖霊の力によってなおのことキリストの似姿に近づいていくのです。傷のない、神の子どもとなっていくのです。苦しみを通して、なおのこと聖なる者として整えられていきます。

そして「いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。」と言っています。「いのちのことば」ですが、私たちに命を与えます。私たちが肉に従えば死んでしまいます。けれども、御霊によって肉を殺せば、生きることができます。主の御言葉にすがっている時に、私たちは死ぬのではなく、生きることができます。そして、ここの「しっかりと握って」というのは、「しっかりと伝えて」というように訳すこともできます。つまり、いのちの御言葉を、周りの人々に命を与えることのできる御言葉を伝えるということです。御言葉をしっかりと握りしめるのも、また御言葉をしっかりと伝えるのも、忍耐と勤勉が必要ですね。主が私たちの内で働いておられる、その御霊の働きから得ていきましょう。



そして、「彼らの間で世の光として輝く」とあります。新共同訳では、「世にあつて星のように輝き」とあります。ダニエル書 12 章 3 節には、こう書いてあります。「思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」荒らす忌むべき者が荒らしている、それでも彼の惑わしに乗ることなく、見分けることができた人々が、ここで言っている「思慮深い人」のことです。ですから、いのちの言葉をしっかり握ったわけです。それだけでなく、「多くの人を義とした者」です。他の人に御言葉を伝えて、その人たちが義と認められていくようになることです。そうすると、夜空に輝く星のようになる、ということでもあります。

それは、私たちはこの世にいながら、なおのことキリストにある希望を持っていることです。憎しみがあるのに、そこに赦しを持っています。争いがあるのに、なぜか若いと平和を持っています。これらのことをするのはとても容易くできるのですが、敢えてその反対のことを行ないます。しかし、私たちはキリストに従順になって、敢えてキリストを選び取ります。その中で、真の勝利者になることができます。世において、同じ暗闇ではなく、光として輝くことができるのです。

そして「そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」と言っています。主が戻って来られて、教会が引き上げられる時のことです。自分の努力したことや苦勞したことというのは、前者は運動での練習、後者は織物を例えています。努力しての練習、そして苦勞して織物をしたということですが、パウロが彼らに福音を伝えた時に、このような手間がかかったということです。そして、その努力がピリピの中に実を結ばせているのであれば、その働きは決して無駄にはならないということですね。テサロニケ人への手紙でも、パウロは同じことを話していました。「誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの苦勞がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。(1テサロニケ 3:5)」ですから、ただ伝道して、救われればよいということではありません。確かにその人が信仰に立ち、揺るがされることなく成長できているのかどうか、確かめるところまで育てないといけないのです。そして、主が来られる時に、その実にしたがって私たちが豊かに報いてくださいます。ですから、私たちがしていることはまさに、主人であるイエス様を喜ばせる働きなのです。

### **3A 注ぎの供え物 17-18**

17 たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。18 あなたがたも同じように喜んでください。私といっしょに喜んでください。

パウロは、自分がこれからカエサルの前に出て、死刑に処せられるかもしれないことを話しています。「注ぎの供え物」とありますが、これはぶどう酒を祭司が主の前に注ぐ供え物のことです。パウロは今、自分自身がその供え物になると言っています。それが、「あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに」と言っています。供え物は犠牲のこと、礼拝は奉仕と言い換えてもよいでしょう。ピリ

ピの人々が主に仕えていること、そして神にあつて犠牲を払っていること、それを信仰によって行っていることをパウロは良く知っていました。そして、その中で「私は、自分自身の命を主に捧げすることは喜びです」と言っているのです。ピリピの人々の献身的な交わりがあり、それで死んだのであれば、それは主に捧げるものであるから、喜びであるということでもあります。

そして、彼が死ぬ時も、その喜びにならって喜んでほしいと願っています。私たちは、もちろん誰かが信仰のゆえに死んだのなら、心は悲しくなるでしょう。しかし、霊は喜んでいてくれます。主に仕え、主にささげ、その結果、命をも捧げるのであれば、そこには天上の喜びがあるということです。そして、このことを全ての人たちが交わりとして共有します。共同体の人たちは、神の恵みをその働きに預かることで、共有します。パウロに献金を渡した、そこにある交わりによって、彼が喜んでいてくれることが、自分たちも同じように喜ぶ理由となります。そして、自分たちも苦しんでいますが、思いと心をついに奮闘しているのであれば、そこに喜びがあります。

これが従順な生活です。主に捧げた生活です。何かを得るのではなく、持っているものを捨てて、捧げる、キリストを選び取るために捨てることによって、そこにある喜びであります。そこに、私たちは無くなります。けれども、キリストが満ちてくださいます。その霊的祝福のゆえに、喜びに満たされるのです。